
博士と助手。

保科 郁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

博士と助手。

【Nコード】

N0681D

【作者名】

保科 郁

【あらすじ】

とある研究所にいる、博士と助手のお話。コメディ風。(特に意味もオチもなくノリだけで進んでる感じです) 、 、 (スイマセン)

透明薬―1

「やった！ ついに出来たぞ！」

そこはかたなく怪しげな雰囲気が漂う部屋の中、我が師である博士が勢い良く立ち上がった。高々とビーカーを掲げて。

「……………何ですか、それ？」

「おお！ よくぞ聞いてくれた」

博士は握り締めているビーカーを振りかざし、嬉々としてこちらを振り向いた。

ビーカーの中には紫と灰色が交じったような奇妙な色の、何故だかぼこぼこ泡立っている液体が入っている。

どうでもいいが、その物体Xを目の前にかざすのは止めて欲しい。とてつもなく危険な香りが漂ってくるじゃないか。

「これはまあ、いわゆる透明人間になれる薬だ！ 苦節二時間……………
ようやく完成したのだ！！」

やけに静かだと思ったら そんな事してたんですか、あんた。真面目に仕事してくださいよ。

呆れ返った私の視線も気にならないのか、博士は薬の効能を熱くそれはもう、うざい位 熱く語ってくれている。

……聞き流しとこつ。

私はこれ以上無い良策を導きだした。ついでに物体Xからさり気なく身を離し、安全を確保しておく。

「……と言っわけで、試してみてくれないかね！」

せつかく身を離れたというのに、博士が勢い込んで ずずいと身を乗り出してきたおかげで、私はまた窮地に立たされた。

や、止める！ 私はまだ死にたくないぞ！！

目の前で今にも零れそうなくらい波打っている物体Xを見て、心の中で悲鳴をあげる。身を仰け反らせながら、自分の口元が引きつるのを感じた。

「いえ私は、透明になりたいと思った事は」

「もちろん、あるよね！！」

断ろうとした私の言葉を遮り、博士は目を輝かせながら宣^{のたま}った。

「透明になったら、女の子の秘密とか覗き放題だからね！ 銀行強盗^{おて}だつて御手の物だぞ！！」

人に犯罪を勧めんな！ って言うか あんた、そんな事を考えて

透明薬 という名の物体X を作ったんですか！？

「さあ、遠慮なく飲んでくれたまえ」

「嫌です」

もちろん断る。当たり前だ。誰が飲むんですか、そんな怪しげな物体を！

「え、何でさあ？ 君と私との仲じゃないか、飲んでくれよお」

「……博士と助手以上の関係になつた覚えはありません」

むしろ、それすら抹消して赤の他人になりたい。今、この瞬間にも。切実に。

「も、冷たいなあ。……よし、分かった！ 今ならこの毛生え薬もつけよう！！」

「いいりません！」

どこからか また怪しげな物体を取り出した博士に、私は間髪入れずに返した。どこぞの悪徳訪問販売ですか、あんた。

私の拒絶に、博士は不満の声を呟きながらいじけだしてしまった。

無視だ、無視！ ここで付け上がらせたら碌ろくな事にならない。

というか、いい年したおっさんが床にしゃがみ込んで“の”の字を書いている姿はとてつもなく不気味だ。果てしなく気持ち悪い。

「……ひどいよ、卯月君うづき」

少し涙目になりながら顔をあげる博士。どうやら声に出してしまっていたようだ……まあいいか、どうせ博士だし。

「私は本当のことを言っただけですが、何か？」

それとも何ですか。自分は可愛いとか思ってたんですか？ あんた、むさ苦しいの一言に尽きますよ。

「うっ……っ」

やっと己を自覚したのか、博士はそれ以上 何も言ってこなかった。

静かになった所で、私は謎の物体X、Yを見た。今だにぼこぼこ泡立っているXと、何やらゆっくり対流しながら黄色の煙を立ち上らせているY。

……果てしなくやばすぎるだろ、これ。

「とりあえず捨てときますね」

「……っ!? 何を言っただ卯月君!!」

至極^{じごく}まともな反応をした私に、血相を変えて縋^{すが}り付いてくる博士。きもい、触るなおっさん。

「い、いや。私がおっさんなのも気持ち悪いのも認めるから、それは棄てんでくれ!!」

涙声で卑屈な態度をとってくる博士に、さすがの私も憐れな感情を覚えた。

まあ、一寸の虫にも五分の魂というし……?

私は棄てるのを一旦諦め、物体X、Yを作業台に静かに戻した。手荒に扱って、零れでもしたら大変な事になる気がする。

その作業台の横では博士が静かに涙を流していた。何ですか、鬱^{うつ}陶^{とう}しい。

「……卯月君。さっきから心の声がだだ漏れなのだが……わざとな

のかね」

「いえ、わざとだなんてとんでもない。無意識という名の悪意です」

その私の言い分に、更に涙を溢れあふさせる博士。

「うつつ……。何でそんなに冷たいんだ。私は君に何かしたのか？」

「ええ。何かしたかと言われれば 散々されていますね。取り敢えず 初日ここに来た時、試験と称して色々と変な物を飲まされましてたけど、あの時の事は一生忘れませんよ。一週間は寝込みましたし」

あの時は本当に死ぬかと思った。実際 生死の境を彷徨っていたらしいし、お花畑も見たような気がする。

「いや、あれは臨死体験をするという……」

「言い訳はいりません。とにかく博士、臨死体験と言わず百回くらい死んどいてください」

その力一杯 私の心を込めた言葉に、博士は ぼろ泣きを始めた。ああ、鬱陶うつとくしい。

「それで、この薬はどうするんですか」

私は絶対に、何があっても飲みませんけど。というか一秒でも早く、この世から消滅させてしまいたい……。製作者ごと。

「う、卯月君!？」

私の黒い感情に気付いたのか、博士が目に見えて焦りだした。

「嫌ですね博士、何を焦っているんですか。私が何かするわけないじゃないですか」

「そ……そうだ、よね」

「本気でする時は、気付かれないようにしますよ。警戒されては元も子ありませんから」

「卯月君！！！？」

ほんの少しの本音が混じった言葉に、博士は「ずぞぞっ、と壁ぎわまで身を引いた。その本音が九割八分くらいあるのはここだけの話である。」

透明薬 12

「まあ冗談はさて置き。本当にどうするんですか、これ」

私は奇妙な物体達を指しながら「本当に冗談なのか？」と、胡乱うごんげな眼差しを向けてくる博士に尋ねた。

「う……、じゃあ私が飲もう」

警戒を解かずに じりじりと近づいてくる博士。きつとそのまま沈黙していたら、棄てられる事に感付いたのだろう。私は内心舌打ちした。

本当なら博士が関わった物なぞ この世から全て、分子レベルまで抹消してしまいたいんだけど……。まあいいか、誰かに飲ませるよりはましだろう。何かあったとしても博士だし。

私が見守る中、博士は躊躇ためらいもなく物体Xを飲み下した。

……今、ほんの少しだけ尊敬のようなものが生まれた 気がする。

「う……うまい!!」

「涙目で言っても説得力ないですから」

力のかぎり叫んだ博士に、冷静に突っ込みを入れてさしあげる。私にも飲ませようと思っても、そうはいかない。

博士は不満げな顔を見せたが、直後

「ぐっ!？」と唸り声をあげ しゃがみ込んだ。

「ああ、ほら言わんこつちや無い。腹でも壊したんですか？」

どうしようもない腐った人物とはいえ、一応 仮にも、この上なく不本意ではあるが私の上司である。不肖の上司に何かあった場合、面倒を見なければいけないのは、助手である私だ。

義務的に様子をうかがうと、博士は唸りながらも滂沱ほうたたる涙を零していた。そんなに辛いのだろうか。

それより面倒臭いので、さっさと立ち直って欲しい。仕事が山ほど残っているのだから。

しばらく、うーうー言いながら博士は涙を流し続けていたが、急に手を痙攣けいれんさせ始めた。

……これは本気で危ないかもしれない。どんなに厄介者であっても博士は、この研究所ではなくてはならない人なのだ。非常に不愉快ではあるけれど。

一緒にいる時に死なれてもしたら、責任を追求されかねない。死んでくれるのは願ってもない事だが、私と関係のないところでやって欲しい。

私は救急車を呼ぼうと電話に手を延ばした。

「おおっ！！！？」

けれど博士が奇声を発し それにつられて目を向けた私は、その異様な光景に つい手を止めてしまった。博士の身体が、指先から徐々に透明になっていつているのだ。

博士は薬の効果に、歓声の雄叫びおたけを上げている。うるさいので取り敢えず、手にしていた電話の子機を投げ付け沈黙させておいた。

それにしても、本当に完成していたとは。さすが　と馬鹿は紙一重……を地でいく博士なだけはある。

「やったあー！　さすが私！！」

妙に納得している私の耳に、またもや博士の雄叫びが響いた。……やはり、子機では威力が足りなかったか。すぐに復活してしまったようだ。

自画自賛している博士に、そこはかたなく不快感を覚えた私は、目に付いた物をなんとなく手に取ってみる。

「う、卯月君？　その物体をどうするつもりなのかね？！」

博士　というか、空中に浮かんでいる白衣一式は、声を震わせながら尋ねてきた。

「いえ、別に……」

私の手には、百科事典も斯くかや　というような、分厚い本が握られている。

「ただ何となく、手に取りたくなっただけですよ」
「ひいっ！！」

にこりと笑顔を向けた私に、博士は何故だか悲鳴を返してきた。失礼な。

白衣は私から、ゆっくり距離を取り始める。白衣だけが蠢めいいている様は、なんだかとても気味が悪く、私の不快感を更に煽あおっている気がする。

「と、取り敢えずその手に持った凶器……いや、辞書を下ろしてくれないかね?!」

いつの間にか 私は本を振り上げていたらしい。おや、どうしたんだろう。謎ですね。

「不思議そうな顔をしつつ、迫ってくるのは止めたまえ!!」

白衣はもう涙声である。仕方ない……。私は名残惜し気に本を机に戻した。

あからさまに、ほっと息を付いた白衣。その様子に、何だかまた黒いものが浮かびそうになったが、私は気力で押し止める。

「まだだ、今はまだ駄目だ。」

……そう、頭の奥底で声が聞こえた気がした。

「そ……それで、だな」

白衣は何故かびくつきながら話し始めた。

「この効果を確かめる為に、外に出てきていいかな?なんて……はい、調子に乗りました。すいません」

私の放つ　どす黒い雰囲気気付いたのか、途中で意見をひるがえ翻す白衣。当たり前だ。どんだけ仕事が溜まってると思ってるんですか。

「早く仕事を終わらせてください」

笑顔で頼んだ私に白衣は引きつりまくった返事を返し、自分の席に戻った。

そして、何故か自分の白衣を持ち上げ　∴。

「脱がないでくださいね？」

私の言葉に手を止める。やっぱり脱ぐ気だったか。

「え、いや。卯月君もどこまで透明になっているか気になるだろう？」

「なりません」

そもそも、同じ部屋に裸のおっさんが居るなんて果てしなく嫌だ。例えそれが目に見えないとしても。

「というか、透明になってここから逃げ出そうとしてないですよね？」

「そそそそんな事、考えている訳ないじゃないか！　卯月君!？」

……分かりやすすぎる。どうしようか、このおっさん。

私は取り敢えず、手元にあった珈琲　すでに冷めているのが残念だ　を、白衣の頭らしき所にぶちまけた。

「ぎゃ！？ 何をするんだね！！」

博士の皮を被った白衣が抗議の声を上げた。白衣は白の文字を使うのが申し訳なくらい、茶色に染まってしまった。

その上には、うっすらと茶色の輪郭が浮きあがってきている。

透明薬―3

「いえ、見えるようにしておこうかと」

白衣に珈琲をかけたのは、なにも悪意があるからでは　いや、七割り……八、九割りはそうかもしれないが、本当の目的はそれではない。色を付けることに意味があるのだ。

今のままでは、博士が白衣を脱いでしまえば　どこに居るともしれなくなる。それで外に抜け出すならともかく、悪戯をされてしまつては目も当てられない。

いい大人が悪戯なんかするか！……と思いたい所だが、博士に限つてそれは当てはまらない。

「だからといって珈琲はないだろう、珈琲は！？」

「どうやら博士は珈琲がお気に召さないらしい……。私はため息を一つつくと、壁ぎわにある棚に向かった。

「う、卯月君？　ななな何をしているのかね！？」

「いえ、だって。博士は珈琲がお嫌いなのでしょう？」

我儘な上司を持つと苦労するものだ。そう考えながら私は濃硫酸という、珈琲の代わりにすべき物を手にした。

「ひっ！　ととと溶ける、溶けるっ……！」

「大丈夫ですよ。ほら、透明ですから溶けても分かりませんって」

またもや壁の隅まで逃げ込んでしまった白衣を、猫なで声でおびき寄せようとしたが敢えなく失敗。白衣は更に縮こまってしまった。

「そういう問題ではない！ 卯月君は私に殺意でもあるのかね！？」
「今頃 気付いたんですか」

さらり、と答える私に「そんな馬鹿な！？」と驚愕する白衣の聲が聞こえてきた。

そこ、驚くところなんだ。今まで散々な事をされてきた私の中では、物凄く辻褃が合っている展開なのですが。

「わわ私を殺すのか！？」

怯える白衣を見て、私の殺意が二割増した。何故だろう？ もはや、見るだけでも駄目なのか。

もしかしたら、博士が透明なのも関係しているのかもしれない。今なら殺害しても、誰にもばれない………完全犯罪。

「何故そんな、してやったり！ のような笑みを浮かべるのかね！？」

はっ！？ 危ない、危ない。どうやら無意識に笑みを浮かべていたらしい。やはり事を起こすには冷静でいなければ。

「いえ、ちょっと思い出し笑いしてただけですよ」

正確には思い込み笑いだが、さほど違いはないだろう。それより

「あ、博士。そんなに濡れていては風邪をひいてしまいます。お拭きしますからこちらへ」

「……………何を企んでいるのかね？」

気を使った私の言葉に、何故か疑わしげな声色で返す白衣。

「企むだなんてそんな。ただ博士の身が心配なんですよ」

嘘はついていない。ある意味正反対の心配だが。

「そもそも私が濡れているのは君のせいなんだがね？」

「でしたら尚更、私がしなければなりません」

さっきとは逆に、今度は私が身を乗り出す。

「えーと、卯月君？ どう見ても手には拭けるような物がない……………」

「というか、濃硫酸しかないように見えるのだがね？」

「ちゃんとハンカチも持ってますよ」

注文の細かい白衣の望み通りに、ポケットからハンカチを取り出す。それと同時にさり気なく距離を詰める。

「そういう意味ではなく、濃硫酸はなんの必要が？」

「私の心の平穏を保つ為です」

「……………」

壁を背に 少しずつ出口に向かう白衣に、じりじりと近づく私。
何だか妙な緊張感が部屋に漂う。

「さあ博士、ふざけてないで」

「すいませーん。博士います〜?」

一気に間を詰めるべく私が動こうとした時、タイミング悪く研究員が入ってきた。鍵を掛けておけば良かった、と内心 舌打ちする。というかノックくらいしてほしい。

「佳奈君〜!!」

「うわきゃあああ!!」

これ幸いと研究員 佳奈に飛び付く白衣。

と、その白衣を殴り飛ばし踏み付け 更にはすり潰そうとしている佳奈。

まあ いきなり白衣が飛び掛かってきたら反撃するよな、普通。

私は段々とボロ雑巾のようになっていく博士を傍観しながら、心の中で合掌した。

そうして今日も、騒がしい一日が過ぎていくのであった
…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0681d/>

博士と助手。

2010年10月28日07時30分発行